

全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：人間形成と思想  
部会長名：齊藤 誠一  
作成者名：齊藤 誠一

概要（2000 字）

**実施体制：**平成 25（2013）年度の本教育部会は、大学教育推進機構 3 名（1 名退職のため後期は 2 名）、人文学研究科 10 名、国際文化学研究科 4 名、人間発達環境学研究科 17 名、保健学研究科 4 名、海事科学研究科 1 名、の計 39 名（後期は 38 名）から構成され、教育部会長 1 名（人間発達環境学研究科）、幹事 2 名（人文学研究科、国際文化学研究科）が世話役になり、運営された。

**開講科目：**教養原論として「哲学」（4 コマ）、「行為と規範」（3 コマ）、「科学技術と倫理」（2 コマ）、「論理学」（2 コマ）、「心理学」（4 コマ）、「心と行動」（6 コマ）、「教育学」（3 コマ）、「教育と人間形成」（3 コマ）の 8 科目 27 コマ、共通専門基礎科目として「倫理学 S」（2 コマ）、「心理学 S」（2 コマ）の 2 科目 4 コマ、全体で 10 科目 31 コマが開講された。

**実施状況：**「哲学」は人文学研究科と国際文化学研究科の教員により、「行為と規範」は国際文化学研究科の教員により、「科学技術と倫理」は人文学研究科の教員と非常勤講師により、「心理学」「心と行動」「心理学 S」は大学教育推進機構、国際文化学研究科、人間発達環境学研究科、海事科学研究科、保健学研究科の教員により、「教育学」は人間発達環境学研究科の教員により、「教育と人間形成」は大学教育推進機構の教員及び非常勤講師により、「論理学」「論理学 S」は非常勤講師により行われた。

**教育の現状とその評価：**

①**教育内容：**「人間形成」に関わる問題を多角的に取り上げ、人間形成のありようと思の意義について、①哲学・思想領域（論理学・行為と規範）、②心理学領域（心理学・心と行動）、③教育学領域（教育学・教育と人間形成）、④科学倫理領域（科学技術と規範）から学習できるように教育課程が編成されており、学習目標に沿った講義を提供していると評価できる。また、3 年前より現代の科学技術社会における倫理性の意義を深める目的で開講された「科学技術と倫理」は開講時より各授業とも 200 名程度の受講生を得ており、本教育部会担当授業科目として定着してきた。また、2 年前より設定された「倫理学 S」「心理学 S」も教養原論の「論理学」「心理学」と差異化がなされ、専門基礎科目として適切な授業内容を提供している。

②**教育方法：**懸案であったクラス規模については、最大で 200 名がほぼ実現されたが、まだいくつかの問題が残されている。ひとつは、抽選が必要なほど学習ニーズの高い科目に対して、抽選に漏れた学生のモチベーションを維持するためにどのような補償がありうるか、本当に学習したい者が学べる仕組み作りがさらなる検討が必要であろう。2 つめは、クラス規模が原則 200 名以下になったとはいえ、各期当初の人数は、前期では 15 コマのうち 14 科目が 100 名以上規模（うち 11 科目が 150 名以上規模）、後期では 12 コマのうち 9 コマが 100 名以上規模（うち 7 コマが 150 名以上規模）となっている。例年指摘してきたように、こうしたことは本教育部会担当授業科目への関心の高さを示すものであるが、100 名以上の受講生に対するきめ細かい対応は極めて難しいと言わざるをえない。これまでも各担当者においては、VTR、DVD、パワーポイント等の視聴覚教材の使用、コメントペーパーやミニレポートとそれに対するフィードバックなど授業の質保証のための努力がなされているが、一方で遅刻・早退者、私語、スマートフォンの使用、他教科の予習など当該授業外活動、居眠りなどに対しては、厳しく注意を与えることや授業方法の工夫といった教員の努力だ

けは解決できないこともある。たとえば、TAを大規模授業に重点配分し、机間巡視などによる個別指導なども検討すべきであろう。

- ③**授業成果**：学生の授業評価では全般的に肯定的回答がなされており、授業中のコメントペーパーなど提出物等から判断しても、おおむね教育の成果や効果があがっているといえる。しかしながら、授業評価アンケートについて、特に100人を超える授業では10%に満たない回答者からの回答結果をどのように解釈するか慎重に吟味する必要がある。また、実現の難しい悉皆調査だけでなく、標本調査を用いるなど授業者の努力が適切に評価される方法も考慮されるべきであろう。

#### まとめと今後の課題

まず、本教育部会担当授業科目には、一部で大規模クラスにならざるを得ない状況にありながらも、各担当者の工夫と努力により、全般的に各科目の目的に応じた適切な授業がなされている。また、時代的要請に応える授業科目として設定された「科学技術と倫理」、専門基礎科目として設定された「論理学S」「心理学S」は、より適切な内容を有した授業として受講生から評価を得ている。一方、大規模クラスの授業では、担当者の努力や工夫だけでは解決できない問題もあり、またTAの重点配分、出席管理や成績管理の新たなシステム導入など担当者の負担を軽減することも重要である。

様式2（続き）

#### 項目・観点ごとの記述

##### 基準5 教育内容及び方法

- 5-1【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であること。】

- 5-1-③：教育課程の編成又は授業科目の内容において、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に配慮しているか。

（観点到に係る状況）

回答者全員から「はい」の回答を得ており、いずれの授業においても学生の多様なニーズ、学術の発展動向等に配慮しているといえる。

#### 根拠資料

シラバス、配付資料、視聴覚資料、最近改訂された教科書、コメントペーパー

- 5-2【教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。】

- 5-2-①：教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法が採用されているか。

（観点到に係る状況）

回答者全員から「はい」の回答を得ており、授業で配付資料、視覚映像メディアが利用されるなど適切な学習指導法が採用されているといえる。また、大規模授業では、視覚映像メディアによるデモや疑似体験、ミニレポートの活用などの工夫がなされている。

根拠資料

シラバス，配付資料，ビデオやDVDなど視覚映像メディア，ミニレポート

5-2-②： 単位の実質化への配慮がなされているか。

（観点に係る状況）

回答者全員から「はい」の回答を得ており，シラバスや第1回授業時に授業内容や目標を明確にして授業への関与度を高める一方，うりぼーネットによる課題や発展学習の提示，中間レポートの実施など単位の実質化への配慮がなされているといえる。とくに，授業外での学習の促進についても努力が見られている。

根拠資料

シラバス，配付資料，コメントペーパー，中間レポート，授業記録

5-2-③： 適切なシラバスが作成され，活用されているか。

（観点に係る状況）

回答者全員から「はい」の回答を得ており，適切なシラバスが作成され，活用されているといえる。

根拠資料

シラバス

5-2-④： 基礎学力不足の学生への配慮等が行われているか。

（観点に係る状況）

教育部会として組織的な対応はなされていないが，各教員において授業後の質問やオフィスアワーにより学生に対して適切に対応しているものと思われる。ただ，客観的に基礎学力不足学生を把握し，積極的な関与を行うためには，小テストなど形成的評価の実施とともに，個々の学生の成績状況に関する情報の担当教員への事前提供が必要となる。

根拠資料

シラバス，オフィスアワー

**5-3 【学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）が明確に定められ，それに照らして，成績評価や単位認定，卒業認定が適切に実施され，有効なものになっていること。】**

5-3-②： 成績評価基準が策定され，学生に周知されており，その基準に従って，成績評価，単位認定が適切に実施されているか。

(観点に係る状況)

回答者全員から「はい」の回答を得ており、策定された成績評価基準がシラバス、あるいは授業時での告知などで学生に周知されているといえる。また、その基準に従って、成績評価がなされているかの検証は一部教員により成績分布、GPA 分布などによる検討がなされているが、今後は統一した方法による確かなエビデンスに基づく検証が求められよう。

根拠資料

シラバス、第1回授業時でのオリエンテーション、配付資料、成績分布、授業評価分布

5-3-③： 成績評価等の客観性、厳格性を担保するための措置が講じられているか。  
(観点に係る状況)

5-3-②の回答、担当教員からの報告などから判断する限り、シラバスへの評価基準の公開の上、試験答案、レポート評価、出席状況などにより成績評価がなされており、一定の客観性と厳格性は担保されていると思われる。

根拠資料

試験答案、レポート、出席簿、シラバス

## 基準6 学習成果

6-1【教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。】

6-1-②： 学習の達成度や満足度に関する学生からの意見聴取の結果等から判断して、学習成果が上がっているか。

(観点に係る状況)

回答者のうち、16名から「はい」、2名から「いいえ」の回答を得ており、おおむね学習成果はあがっているものといえる。

根拠資料

学生授業評価、感想文

## 基準7 施設・設備及び学生支援

7-1【教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。】

7-1-④： 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

(観点に係る状況)

おおむね自発的学習環境は整備されているものと思われる。

根拠資料

図書館，大学教育推進機構および各学部の自習室など

**7-2【学生への履修指導が適切に行われていること。また，学習，課外活動，生活や就職，経済面での援助等に関する相談・助言，支援が適切に行われていること。】**

7-2-①： 授業科目，専門，専攻の選択の際のガイダンスが適切に実施されているか。  
(観点に係る状況)

回答者のうち，10名から「はい」の回答を得ているにとどまっているが，履修指導については学部での履修計画に依存するため，積極的な関与は難しく，当該授業内容についてはシラバスでの記載，第1回授業での説明によりガイダンスを行っている。

根拠資料

配付資料，第1回授業資料，シラバス，各学部の学生便覧

7-2-②： 学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されており，学習相談，助言，支援が適切に行われているか。

また，特別な支援を行うことが必要と考えられる学生への学習支援を適切に行うことのできる状況にあり，必要に応じて学習支援が行われているか。

(観点に係る状況)

回答者のうち，14名から「はい」，4名から「いいえ」の回答を得ており，「はい」の回答者ではオフィスアワーやメールによる質問受け付けの提示などにより，学生からの要請に対して対応して，学習相談などを行っている。ただし，教員の側から積極的に学生支援に関する学生のニーズを把握することはむずかしく，事前の診断的評価によりレディネスやニーズを把握する工夫も必要かもしれない，また，特別な支援を必要とされる学生が受講生にどうかは授業だけを担当する教員には把握するのが困難であり，事前に当該学生の情報などを周知されることが必要である。

根拠資料

オフィスアワー，シラバス